

# 南の風

春号  
Vol.3  
2007.4-6



沖縄の色・形  
「エッセイ」沖縄日和」  
光彩に秘められた琉球の歴史  
もてなしの文化 ゆたかはじめ  
琉球漆器



ふしぎがいっぱい  
公・園・点・描

## 高欄の獅子

首里城正殿の基壇(建物の基部に築いた石造や土造の壇)にはじめて石高欄(手すり部分)が取り付けられたのは1508年のことで、戦前まで石高欄は1712年頃に再建されたものといわれています。現在、この石高欄の中央付近と正面石階段の登り高欄の親柱には、毬とじゃれたり、子獅子を抱いたり、毅然と座っている獅子など、それぞれポーズの異なる12体の獅子が座っています。高欄に獅子を彫刻するのは中国に見られる形式で、沖縄では国王の墓所・玉陵(たまうどろん)や円覚寺放生橋の石高欄にもあります。

季刊誌 **南の風** 春号  
Vol.1 2007.4-6

発行/財団法人 海洋博覧会記念公園管理財団

2007年4月1日発行

発行責任者 富田 祐次

〒905-0206 沖縄県国頭郡本部町字石川424番地 TEL.0980-48-2741(代) FAX.0980-48-3339

(財)海洋博覧会記念公園管理財団 kaiyohaku.jp 沖縄美ら海水族館 kaiyohaku.com  
熱帯ドリームセンター oki-park.jp/tropical 熱帯・亜熱帯都市緑化植物園 oki-park.jp/midori  
首里城公園 www.shurijo.com 国営沖縄記念公園 oki-park.jp



# 琉球漆器

## 光彩に秘められた琉球の歴史



▲葡萄栗鼠箔絵東道盆（ぶどうりすはくえとうんだーぶん）／赤金と青金で葡萄と栗鼠を表現。内側に九ヶの小皿がセットされている。

燃えるような朱色の大きな柱、落ち着いた深みのあるベンガラ色の板壁、鮮やかな首里城の朱色は見る人に感動を与えてくれる。この琉球王国の王宮の色彩を担当したのが漆芸作家の前田孝允さんである。特に首里城二階に飾られている玉座は前田さんの手によるもので、琉球漆工芸の粋を極めた作品として名高い。その前田さんの工房を訪ね、琉球漆器の歴史や特徴を伺った。

### 漆芸一筋の歩み

古都・首里の一角にある前田さんの工房は、そこで生み出される煌びやかな琉球漆器とは対照的に、こぢんまりとした木造家屋である。落ち着いた雰囲気の間接の奥に作業所があり、近辺の喧騒をよそに異次元の空気が漂っている。

前田さんは琉球大学美術工芸科を卒業後、恩師の安谷屋正義氏から紹介された漆器会社のデザイナーの仕事に就く。当時、漆器会社が大学卒の新進気鋭のデザイナーを採用するというのは異例のことだった。就職五年目に開いた「うるしデザイン展」は、戦前戦後を通じて初めての漆



器展示会で関係者を驚かせた。県内ばかりでなく、「第三回九州クラフト・デザイン展」に出品して、高い評価を受け、準会員に推挙されている。また、「日本ハイクラフト展」に同人として出品するなど、若いときから沖縄漆芸会のホープとして期待されていた。しかし、民間会社では自分の考えだけでは仕事ができず一九六八年に退職。以来、漆芸筋の歩みを続けている。

## 多種多様な 琉球漆器の技法

漆器の生産には高温多湿の気候が適している。漆が乾燥する温度は二十度以上で、湿度は八〇パーセントといわれている。この条件は沖縄の年平均の温度と湿度であり、自然の状態乾燥するため新鮮な朱の色が出せる。また、降り注ぐ強烈な



螺鈿小箱を制作中の前田さん

紫外線には漆を透明にする性質があり、より鮮やかな朱色を醸し出すという。琉球漆器は沖縄の季候風土が生み出したものと言えそうである。

琉球漆器は技法も多様である。沈金、箔絵、螺鈿、堆錦のほか密陀絵、漆絵、蒔絵、堆朱、彫木漆塗りなどの加飾技法がある。漆器の素地(きじ)は、主にスギ、ダイゴ、センダン、チャージ(イヌマキ)などの木材だが、指物、挽



▲螺鈿堆錦食籠(らでんついきんじきろう)／夜光貝と練込堆錦法でみのりの季節を表す。内側に貝で海と星座を描く。

換である。琉球は三山時代から中国との冊封・朝貢関係を結んでおり、中国に漆工芸品を献上し、その返礼に青磁器など多くの品物を手に入れていた。その青磁器などをアジアの国々に運び交易を行っていた。そのため、琉球は優れた朝貢品を開発するために漆工芸品に力を入れた。特に注目されるのが貝を使った螺鈿漆器である。「中国では、皇帝を喜ばすために夜光貝を使った漆器づくりに力を入れていた」と前田さん。当時、琉球のサンゴ礁の海には宝貝やゴホウラ、夜光貝などが豊富に生息していた。貝は貨幣として利用されたばかりでなく、身分を誇示する装身具、工芸品の材料としても重宝されていた。これらの貝は弥生時代、九州から北海道南部まで運ばれ、古代人の装身品

として重宝されている。ゴホウラの貝輪を腕に着けた弥生人の遺体が山口県の「土井ヶ浜」で数多く発掘されている。つまり貝文化が栄え、「貝の道」みたいなものができていたのではないかと推察される。「当時は、これらの貝を採る専門の人たちがぎっぴりいたはず」と前田さんは語る。螺鈿技法は貝を漆器に貼った埋め込んでいくために、貝の殻を砥石で研いで極限までに薄くしていく。〇・〇八ミリ以下のものを薄貝と呼び、その薄貝を文様に切り漆器に貼り付けていくのである。貝は薄いほど美しく、妖しい色を醸し出すので、作家は自分が思い描く色や光沢を出

# 沖縄の気候風土が優れた漆器を生む

物、曲物など漆器の用途に応じで使用される木も異なる。技法の中でも「堆錦」は沖縄独自の技法である。クロメ漆に顔料を加えて餅状にしたものを薄く延ばし、それを文様に切り取って漆器面に貼り付けていく。文様を幾重にも重ねて立体的な表面付けをし、好みに応じて着色していく。「沈金」は素地(きじ)に漆を塗って乾燥させたあと、刃物で彫刻して文様をつくり、そこ

すために精魂を込めて貝を研ぐ。鮮やかな漆に薄貝で加飾する技法は沖縄の気候風土のみで可能である。

このため、琉球王国は「貝摺奉行(かいずりぶぎょう)」を設置してその生産に努めた。貝を薄く削る技術も必要だが、薄い貝を下塗りの漆に貼り付けるには、さらに高度な技術が必要である。この制度は琉球処分の一八七九(明治十二)年まで続いた。かつての琉球王国の繁栄は、このような漆工芸品の優れた技術のおかげと言えそうである。今という「技術、知識集約型の産業」である。果たして現在の沖縄はどうであろうか。

に金を押しつけていく。彫ったところに金を沈めるようにするので「沈金」と呼ばれる。「螺鈿」は夜光貝などの殻を使って装飾する技法で、前田さんの作品にも多い。前田さんの螺鈿技法の代表作は、首里城正殿二階に展示されている朱螺鈿の王様の椅子である。これは尚真王の肖像画をもとに再現したもので、資料収集や時代考証などの時間も含めて完成までに二年を要している。朱の漆に沖縄近海で採取した夜光貝をふんだんに使った螺鈿玉座で、夜光貝独特の虹色の発色がとても美しく神秘的な輝きをもっている。なお、前田さんは、玉座ばかりでなく守礼門、歓会門、継世門などの扁額も復元している。

## 貝摺奉行所の設置

漆器は中国では古くから用いられていた。しかし、琉球漆器のように鮮やかな気品あふれる漆工芸品はなかった。従って、琉球で生産される漆器の方が中国の漆器よりも優れていると思ったようである。そこで、明国は琉球王国が成立する三年前の一四二六年、漆の樹液を買い付けるため琉球に使者を派遣している。中国の青磁器八千個と漆の樹液約二百キロとの物々交



琉球の歴史を漆芸の観点から話される前田さん。現在、浦添市美術館の館長も務められている。

※ベンガラ  
帯黄赤色の無機性の顔料で、化学成分は酸化第二鉄。東洋における絵具として、土器や埴輪の彩色などに古くから使われていた。インドのベンガル地方に産することから、弁柄の字があらわれていたが、転じて紅殻とも書く。

※夜光貝  
リネウレンサザ工科の大形巻貝。殻高八・五センチ、殻径二〇センチ内外。殻表は黒褐色または黒緑色の地に濃褐色の黄白の斑が交互にある。内面は真珠光沢がある。貝類の中でも真珠層が厚く、色、光とも品格があり琉球漆器の螺鈿に使用される。かつて屋久島で多量に産出したことから屋久貝(やくげ)と呼ばれていたものが転じてヤコウガイになつたといわれる。

取材協力／漆芸作家 前田孝允

(沖縄県指定無形文化財保持者)



▲螺鈿盛器(らでんもりき)／朱と黒の塗り分けて海と空を表現している。



▲内総張り螺鈿鉢(うちそうばりらでんはち)／夜光貝を内側の曲面に六等分に貼り付けて市松に金箔を押し込める。



▲葡萄栗鼠大罌(ぶどうりすおなづめ)／繁盛を意味する葡萄と栗鼠を螺鈿と箔絵で表現している。



▲葡萄栗鼠台付六角食籠(ぶどうりすだいつきろくかくじきろう)／栗鼠と葉の一部を夜光貝で葉と茎を金箔を使い、地はミンシ貝塗りにした最大級の五段食籠。





# もてなしの文化

エッセイスト ゆたかはじめ

沖縄美ら海水族館のある本部(もとぶ)半島には、備瀬、今泊など、福木並木の美しい集落が多い。眠っているような町並みの向こうには、青い海が広がっている。私はそんな静かな所を歩くのが好きだ。

この辺りには、また昔ながらの木造民家がわりと多く残っている。最近では、沖縄のどこへ行ってもコンクリート造りの民家が多くなった。台風に強いし、防犯にもなるので無理もないが、木造民家のある原風景は今や貴重な存在である。赤瓦はさすがに少なくなったが、漆喰を塗ったセメント瓦の古民家でも、けっこう昔ながらの風情を漂わせている。そんな民家はどこも開放的で、ふつう門扉も支障もない。

私は車を使わず、沖縄の各地をバスと徒歩で回り、小さな島まで足を伸ばしている。あちこちで道を尋ねたり、珍しい花や風物について聞いてみたいと思っても、集落には人影がない。そこで辺りの民家を訪ねると訪ねることになる。サンゴ石灰岩を積み上げた塀の入口は開いたまま、せいぜい正面にヒンブンという目隠しの

扉があるだけだ。その脇を通って誰でも気軽に中に入って行ける。声をかけ、おばあちゃんが出てきて「まあ座れ」と言われると、ついそのまま縁側に座って話し込んでしまうのである。

すると、沖縄のジャスマンティー「さんびん茶」と、黒砂糖のかたまり「サーター」がまず当たり前のように出される。知らない者がいきなり訪ねたのに、この心づかいが嬉しく、縁側での会話もはずむのだ。冬はボカボカと暖かく、夏は涼しい風が吹き抜けて心地よい。つい長居をしてしまうのであった。三線の音色が聞こえてくることもある。

伊是名島のある民家では、誰が訪ねてくるでもないのに、縁側にさりげなく、さんびん茶とサーターが置いてあった。ちょっと留守するから一休みして待ってて、というわけだろうか。さんびん茶はぬるくなくても、その気持ちの暖かいこと。

多良間島の沖合にある水納(みんな)島は、数人しか住んでいない小島だ。離島巡りをしていて私が、何の期待もせず初

の中で、もてなしにも対応の妙が表われているのではないかと。沖縄はまた、アメリカ世に握手というコミュニケーションの方法を学んだ。手と手を握り、目と目をしっかりと見つめ合って心を通わせる。肌のぬくもりから鼓動、瞳の動きまで心の中に浸み込んでくる。威張るのでなく堂々と胸を張る姿勢もいい。本当のふれ合いがここから始まる。行き会えば兄弟(イチヤリバチョーデー)、友好の第一歩だ。本土の人は握手がどうも苦手な、目をそらせベコベコ頭を下げている。

世界の懸け橋として、どこの国とも仲良くしながら国を富ませてきた琉球王国の姿勢には、学ぶべきことが多い。客人を迎え入れ、自然体でもてなすうまなちの心が、どこかに脈打っていたからではないだろうか。

琉球王府がアメリカのペリー提督一行をもてなした接待料理は、冊封使のものよりランク下のものであった。琉球が豊かであると思われたいくない配慮からだったと、歴史家高良倉吉さんの話を聞いたことがある。当時の緊迫した国際情勢

に礼を尽くし、言葉の不便さを補いつつコミュニケーションをはかるには、心を入れたもてなしが大切だ。こけ脅しの豪華饗宴は却って逆効果になる。

そこで琉球独特の組踊が生まれ、舞踊音楽が演じられ、酒や一馳走が提供された。もともと各地の村落や島々で、うまなちの暮らしに根付いていた、祈りの芸能と捧げ物が基になつている。それをそのまま出すのではなく、中国やアジアの国々、薩摩や江戸からも学び、独特の琉球文化を創り上げていくのであった。どれも格調高く美しいが、どこか控えめな感じをうけるのは私だけだろうか。

紅型や花織などの染織、祈りの踊りや唄、三線などの音楽、一馳走を盛る漆器、陶器などの工芸品、酒造りなどの技術が、もてなしを除から支えたのである。あの沖縄地上戦によつてすべてが失われたが、今に蘇る沖縄伝統芸能、工芸の数々は、みんな接遇の中から生まれたものだ。これこそもてなしの文化といつてよいであろう。武の国では、接遇文化は育ちにくい。

琉球王府がアメリカのペリー提督一行をもてなした接待料理は、冊封使のものよりランク下のものであった。琉球が豊かであると思われたいくない配慮からだったと、歴史家高良倉吉さんの話を聞いたことがある。当時の緊迫した国際情勢

ゆたかはじめ

(本名「石田雅」/いしだ、じょういち)

一九二八年東京神田生まれ、東大法学部卒業。一九九三年東京高裁長官を定年退職後沖縄に移住。初代沖縄県行政オンブズマン、沖縄キリスト教短大教授を務めた。全国鉄道を完全した経験をもとに沖縄に路面電車の導入を提唱中。文藝春秋に書いた「鉄道乗り歩きの旅」が二〇〇六年度日本ベストエッセイの中に選ばれた。著書に「沖縄の心を求めて」「沖縄に電車が走る日」など。美ら島沖縄大使。



めて訪ねたとき。私のために若者がすぐ海に潜り、数匹の魚を採ってきてその場で焼いて食べさせてくれた。

琉球王府が数百年にわたり武器に頼らず交易によって国を繁栄させたのは、もてなしのうまさにあつたのではなからうか。琉球王府の中心首里宮殿は、戦いをするための城ではなく王宮パレスでありアジアの貿易センターとして、迎賓館の役割も果たした。国と国との交易をスムーズに行なうには接遇も必要だ。中でも琉球国王の即位式に参列する中国皇帝の使者、冊封使の一行をもてなすのは、大変なことであった。決して豊かとはいえない小国が大國



# 財団の事業紹介

当財団では、国民の心身の健全な発達を目的に、国営沖縄記念公園（海洋博覧会地区・首里城地区）の維持管理業務を行うとともに、亜熱帯性動植物に関する調査研究及び技術開発ならびに知識の普及啓発、首里城に関する調査研究及び知識の普及啓発活動を実施しており、その成果についてご紹介します。

## 「都市緑化植物園」

### 沖縄の希少植物について 〜オリヅルスミレ〜

#### はじめに

近年、ワシントン条約「絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する国際条約」によって、国際的な希少植物の保護はもとより、国内の希少植物の保護活動も活発になり、我が国においても1992年5月には「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」が公布された。特に、わが国のレッド・データブック「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物（植物I（維管束植物）2000年7月）」によると国内の希少植物は、1、887種類（絶滅種20種、野生絶滅5種、絶滅危惧IA類564種、絶滅危惧IB類480種、絶滅危惧II類621種、準絶滅危惧145種、情報不足52種）にも及ぶ。2006年に編集出版され



写真1 沖縄本島北部の渓流域



写真2 育成温室



写真3 リュウキュウバンケイ



写真5 オリヅルスミレ



写真6 育成状況



写真4 キバナノヒメムリ



写真7 育成状況



写真8 オリヅルスミレ

そのなかで今回は、オリヅルスミレについて紹介する。  
オリヅルスミレ  
(*Viola strombiflora* Yokota et Higa)  
分布：沖縄本島北部（固有種）  
1982年6月沖縄本島北部の辺野喜川中流の溪流沿いで、今までに記録されたことのない奇妙な形態をした未知のスマレが発見され、調査の結果、1988年、日本のスマレでは20年ぶり（アマミスミレが1969年に新種として発表されてから）新種、オリヅルスミレとして正式に発表された。  
オリヅルスミレの特徴は、地表を横にはうように伸びる細長い茎（ストロン、匍匐枝）を出し、その先に子株を形成し、まれにその子株の状態で花を咲かせるところがある。そのストロンの外観から糸につるした折り鶴を連想してオリヅルスミレと名付けられ、学名の意味は「ストロンに花が咲くスマレ」として、その特徴にちなんで命名された。

このスマレは、日本のスマレの中でも最も小型のもの1つであり、葉は丸い心臓形で長さ、幅共に約1cmで、長さ1〜2cmの葉柄があり、裏側の脈上と葉柄に密に毛が生えている。花は、2〜4月頃に咲き、径は約1.5cm、白色の5枚の花びらのうち、下3枚には、紫色のすじが入る。  
発見当時、葉数が2〜3枚の小さな個体が2株生育しているだけだったという。自生地は、ダム建設が予定されていたので、発見者は、2株を採集し、栽培したところ1986年に開花し、未知のスマレであることがはじめて明らかになった。栽培下では、特に夏の暑さに弱く栽培は難しかったよう

だ。しかし、苦心の末に僅かに増殖させることに成功した。その後、栽培を繰り返すうちに大変暑さに弱いことが分かり、広島県の広島植物公園へ送られ育てられてきた。  
しかし、新種として発表されたとき、唯一知られていた自生地は、ダム建設のため水没してしまい、その後も探索が続けられたが、新たな自生地は発見出来ず、現在、レッド・データブックでは野生絶滅種に指定されている。  
当財団では、1989年に広島植物公園から3株を譲り受け、沖縄の地で栽培し、増殖を試みた。温度管理された温室において株を増殖し、随時通常のガラス温室に株を広げていった。やはりガラス温室での栽培は夏場の高温多湿が原因で、7月頃から衰弱、わい化傾向が見られ、株が減少してきた。しかし、用土の調整、朝・夕の床面散水、また、日中の換気（送風）、等を実施するにつれてガラス温室でも生存株数が大幅に増加するようになった（写真6）。1月から4月頃は開花、5月から12月頃には閉鎖花がみられる（写真7）。また、3月頃にはストロンによる伸長が顕著である。ここ10年ぐらい前からは、夏場の高温多湿による株の若干の減少は見られるものの周年を通して安定した数量を保ち管理できるようになった。2007年現在、多数の株に増殖することができ、危険分散を図るため複数箇所管理している。温室の中で見るオリヅルスミレも可憐でかわいらしいが、自然で見るオリヅルスミレには、さらに輝きが増して見えることだろう（写真8）。

た「沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物」には、絶滅種10種、野生絶滅3種、絶滅危惧I類39種、絶滅危惧II類23種、準絶滅危惧82種、情報不足124種、合計846種が記載されている。  
沖縄県は、温暖で湿潤な亜熱帯気候に属するため植物層の豊かな地域であり、固有種約80種を含む約1,700

種の維管束植物が自生している。日本全土の約1%というわずかな面積にもかかわらず単位面積当たりの植物種は45倍にもあたる。それだけ、絶滅の危機にある植物が多いと言える。  
植物種の主な減少要因として、レッド・データブックには、開発行為、園芸用の採取、自然の遷移、森林伐採の4つが挙げられている。その4つに全て人間が関係している。近い将来自然状態で二度と姿を見ることができない植物が確実に増えている。この厳しい現状は自然に関心を寄せる関係者では、周知だが、この事実を知らない人が多くいることも事実である。  
その中で、最近の希少植物種の大きな減少の要因として特に園芸目的の安易な採集があげられ、絶滅の危機が高まっている。これからは、社会一般に自然保護の意識が高まることが望まれると同時に、乱獲を防ぐ施策が必要になってくる。園芸目的の乱獲を減らす策として、採集して販売される種類を大量繁殖するのも有効な方法のひとつであると考えられる。  
**希少植物の保護・育成**  
その様なことから、当財団では、環境問題、特に「生物の多様性の保全」の観点から、沖縄県の希少植物の保護・増殖に積極的に取り組んでいる。これまで、希少植物種の中から、リュウキユウベンケイ（写真3）、キバナノヒメユリ（写真4）、オリヅルスミレ（写真5）等、ラン科植物では県内の野生ラ等を対象に保護及び育成、また増殖並びに栽培技術の確立にも力を入れ、一部には植栽試験等も実施してきた。



【魚類課】

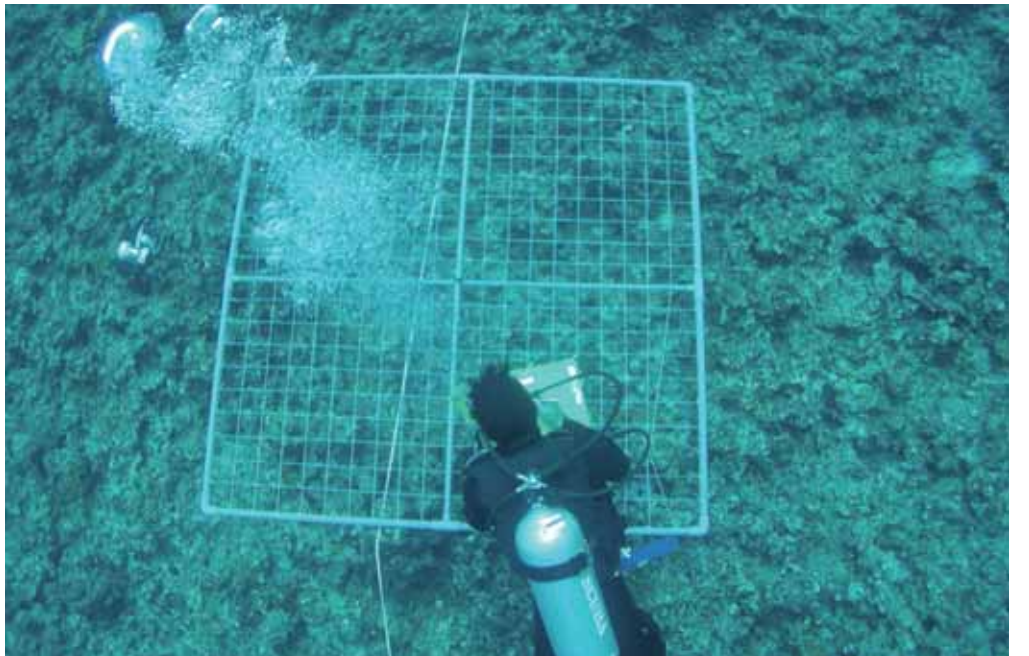
沖繩のサンゴ群集の移り変わり

はじめに

沖繩のサンゴ群集は、大きく衰退している。一般に報じられており、多くの県民もそのように理解している。これは概して間違いではない。しかし、衰退していくサンゴ群集の状態を継続的にモニタリングを行っている研究機関は少ない。(財)海洋博覧会記念公園管理財団では、国営沖繩記念公園事務所からの委託を受け、国営沖繩記念公園(以下公園とする)地先のサンゴ礁という狭い範囲ではあるが、ここに出現した造礁サンゴ類と大型底生生物について、約15年間の移り変わりをモニタリングしてきた。このデータは、日本サンゴ礁学会第8回大会(平成17年11月26日於：琉球大学)でポスター発表を行った。

状況の概要

調査を行った公園地先サンゴ礁では、礁池(サンゴ礁で囲まれた浅い部分)と、外側の礁斜面ではサンゴ群集の状況が異なることが分かった。これはほぼ沖繩本島全体、および一般のサンゴ礁でも言えることであるが、礁池では「種数が少なく、個々の群集が大きく、またサンゴが被覆する面積も大きい」傾向があり、礁斜面では「個々の群集が小型で、種数が多いが被覆する面積が小さい」傾向がある。また、礁池内は水深2〜3m以浅で、礁斜面は3mよりも深い場所であり、種構成も異なる。



調査の状況



移植したサンゴ

よって、サンゴ群集について述べる場合にはそれぞれを分けて説明する必要がある。

\*礁池

礁池に多い種はミドリイシ属の種で、成長が速く、被覆面積を上げて小型群集を覆い、数種のみの大群落を作ることが多い。オニヒトデはミドリイシ類を好むことが知られており、約15年間

の調査期間内にも大発生を繰り返し、ミドリイシ類の成長を抑制していた。公園南部ではスギノキミドリイシの大群落がおニヒトデによって完全に消滅し、その後様々な種類の小型群集が加入してきたことを確認した。

調査開始時点(昭和63年)、公園地先の広い礁池は、オニヒトデの捕食によりサンゴ被度が低い状態であった。

その調査でハナヤサイサンゴ、シヨウガサンゴ等の幼生放出型のサンゴがまじり加入し、その後、ミドリイシ類、コモンサンゴ類が増えてくる様子がデータからうかがわれた。

サンゴ種の移り変わりも平成10年の白化現象により大きく変化した。白化現象は、サンゴの体内に共生している「褐虫藻」と呼ばれる藻類が、高水温など

の影響でサンゴの体内から出て行ってしまう現象である。白化の起こったサンゴはそのままの状態では栄養が十分に取れず、死に至る。ただ、白化しても回復するサンゴ群集もある。白化現象への耐性は種によって異なることが知られている。平成10年の白化現象の影響を調べた調査では、ミドリイシ類、ハナヤサイサンゴ類等がすぐに白くなり、回復する群集も少なかった。逆に生残率の高かったグループは、コモンサンゴ類、ハマサンゴ類などであった。

この白化現象に対する耐性で、公園

地先礁池に優占する種はミドリイシ類からコモンサンゴ類へと移行した。これは公園地先の礁池では現在も継続しており、枝状コモンサンゴ類が50%以上の高被覆度で存在している。しかし、コモンサンゴ類がなかった場所ではその後ほとんどサンゴが回復しない状況が続いている。

\*礁斜面

礁池内とは異なり、礁斜面はサンゴ群集の移り変わりが少ないのが特徴である。よって安定して多種、低被覆面積を維持している。群集の大きさも概して小さいが、所々、パラオハマサンゴやダイオウサンゴなどの超大型群集に遭遇することもある。公園地先では、中央部が最もサンゴの種数、被度ともに高く、傾向として潮通しの良い、透明度の高い場所に多くサンゴが生息していた。主に見られるのは、水深10mより浅い場所ではミドリイシ類だが、それ以深になるとハマサンゴ類、クメイシ類を中心に、多種多様なサンゴがひしめき合っており、場所となる。群集同士はびったりより添うことはなく、必ず



サンゴの白化現象

びつたり群集が生息しているように見えてもなかなか50%以上の被覆度を記録することは少ない。全体にゆっくり成長するサンゴ種ばかりなので、大きな変化が見られないことが多い。

平成10年の白化現象は当然礁斜面にも影響を与えたが、これは普段大きな攪乱を受けない礁斜面のサンゴ種に大きな変化を与える結果となった。礁斜面で白化現象の影響を受けにくかったグループは、主にハマサンゴ類であった。それ以外の種はほとんどがダメージを受け、種数、被覆面積ともに大きく減少した。白化現象から10年近くが経過するが、その後大きな変化が無く、サンゴの回復は遅々として進んでいない。

今後の回復について

沖繩本島周辺の造礁サンゴ類の加入源は、慶良間諸島という報告がある。位置的に沖繩本島西方に位置し、造礁サンゴ類の群集が状態よく保たれていることが、理由としてあげられる。阿嘉島からハガキを放流し、その再捕位置から海流にのって幼生が供給される可能性を示唆した研究も報告されている。現在でも阿嘉島臨海研究所が中心となり調査を継続しているが、衛星から得られる海流情報等もこれを支持している。平成10年以降、沖繩本島周辺ではミドリイシ類はほとんどみられていないため、平成15年の調査で、ミドリイシ類の加入が確認されたことも、本島外からの加入を支持する結果となった。今後、DNA解析でその由来が判明するだろう。

ミドリイシ類の加入は、主に礁縁部から礁斜面上部について確認された。しかし、幼生加入があっても、環境条

件が悪ければ幼生は群集までに成長することができないようである。これを裏付けるデータとしては、平成7年から平成8年にかけて行った移植実験がある。枝状ミドリイシを材料に移植実験を行ったが、公園地先南側ではほとんど成長を見せずに実験群集30すべてが死亡した。他の場所では問題なく成長し、数年後には放卵放精も観察できたことから、これは水質や光量等の環境の影響ではないかと考えられた。しかし、はつきりと環境要因を特定することはできなかった。また、平成12年にも同様に移植実験を行い、水槽内で増殖させた枝状ミドリイシを公園地先礁池内に固定した。しかし、移植群集はほとんど成長を見せず、平成13年の夏期にすべて死亡した。

現在、サンゴ礁の保全を行う手段として行われているのは、サンゴ移植や、オニヒトデ駆除である。しかし、移植のみによるサンゴ群集の回復は、自然環境にあたる人為的影響の改善を行わなければ難しい。オニヒトデ駆除も、慶良間諸島のように、サンゴ群集の保全を設定し、そのエリアを優先的に駆除する方法に切り替えていかなければ、継続的な活動は困難である。自然生態系への保全活動は、そのモニタリング、つまり、さまざまな生物が関わりながら移り変わっていく様子を把握することなくしてはなりたない。これからも継続して調査を行い、得られたサンゴ群集の変遷を、財団内外で広く共有できるように努力する必要があるだろう。



【海獣課】

ウミガメ放流会

はじめに

近年、野生生物は生息環境の悪化、漁業による混獲等により、その数が減ってきています。ウミガメ類もこの例外ではありません。

現生するウミガメ類は世界の海で8種類確認されています。沖縄近海には、アカウミガメ、アオウミガメ、タイマイ、ヒメウミガメ、クロウミガメ、オサガメの6種が生息しています。その内、前3種が沖縄本島および離島の砂浜で産卵します。(写真①②③④⑤⑥)

ウミガメ類はいずれもIUCN(国際自然保護連合)のレッドデータブック(絶滅のおそれのある野生動物種をまとめたもの)で絶滅危惧種I類、II類に指定され、ワシントン条約により取引規制が行われ捕獲・採取を抑制することで保護されています。

ウミガメを取り巻く現状

なぜウミガメの数は減ったのでしょうか？それは護岸工事などによる産卵する砂浜の減少だけでなく、残された砂浜もレジャー等の利用によって照明や騒音が増えたこと、砂浜近くの道路を走る自動車のヘッドライトさえも産卵に悪影響を及ぼします。また、砂浜や海へのゴミの流出も生息環境を悪化させ、



写真⑦ゴミで汚れた砂浜

孵化した仔ガメは、仔ガメ飼育予備施設で1年間飼育を行います。

③放流

甲長20cm、体重1kgほどに成長した仔ガメは公園内の浜(眺めの浜・亀の浜)から放流されます。過去16年間で、約1,600匹の仔ガメが放流されました。(写真⑧⑨)

放流時には仔ガメの前肢に標識を取り付け、回遊調査も行っています。沖縄で放流したアカウミガメが日本各地で再捕獲されたのを始め、遠くはアメリカ西海岸サンディエゴ沖でも再捕獲されました。この太平洋横断10,0



写真①アカウミガメ



写真④ヒメウミガメ



写真②アオウミガメ



写真⑤クロウミガメ



写真③タイマイ



写真⑥オサガメ

ウミガメ減少の大きな要因となっています。(写真⑦)

当財団では、ウミガメの生態や環境保護についての普及啓発事業の一つとして、1990年より「ウミガメ放流会」を実施しています。

ウミガメ放流会

ウミガメ放流会の開催に併せて、卵を確保し、孵化した仔ガメを約1年間育成し放流を行います。

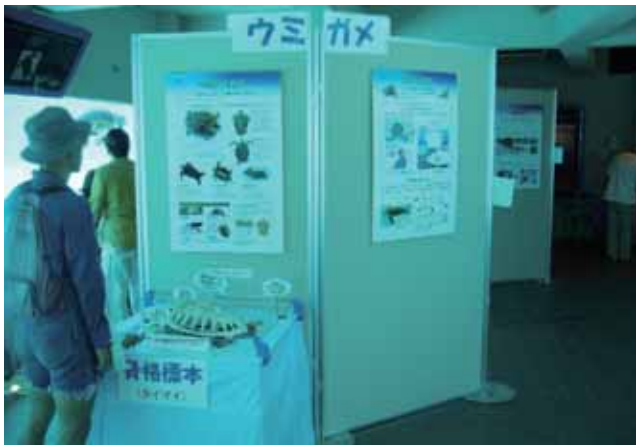
①卵の確保・孵化  
ウミガメ館で交尾・産卵された卵の確保、または産卵調査によって発見された卵(満



写真⑧ウミガメの放流会1



写真⑨ウミガメ放流会2



写真⑩ウミガメ展



写真⑪ウミガメ体験学習風景

00kmの仔ガメの旅により、太平洋の西側で産まれたアカウミガメがアメリカ西側にまで到達することが世界で初めて証明されました。このようにウミガメ放流会は回遊調査の一環ともなっています。

楽しみながらの環境教育

昨年度は放流会後にウミガメ体験学習を行ない、あわせてウミガメ展も開催しました。

ウミガメ展では、生態についてのパネル展示やウミガメ全身骨格標本展示、海でゴミをエサと間違えて食べ死んでしまったウミガメの胃から出てきたゴミを展示し、環境問題について考えていただきました。

一方、ウミガメ体験学習では、実際にウミガメの目線で砂浜を這う体験を行ったり、産卵調査の方法とその意義等について説明し、実際にウミガメが産卵上陸する浜で産卵調査体験学習を行いました。(写真⑩⑪)

おわりに

当財団では、これからもウミガメ放流会や企画展を通して、ウミガメの生態やその現状について知っていただき、皆様と共に自然環境および野生動物の保全を行っていきたくと考えています。皆様のウミガメ放流会への参加をお待ちしております。(夏季開催)



【首里城公園】

琉球楽器の復元プロジェクト

はじめに

当財団では、琉球王朝時代に尾張徳川家へ献上された楽器20点及び楽器を収納する長持の復元制作を平成13年度より、実施して参りました。

現在、徳川美術館（愛知県名古屋市中）に所蔵されているその琉球楽器の調査を、同館のご厚意により実施し、復元制作をスタートすることが出来ました。

復元制作には、県内外の伝統的な技術を持った職人や中国の楽器職人など、多くの人々が関わり、その技術を結集することにより、5年の月日を経て、今ここに琉球楽器の往時の姿を甦らせることが出来ました。



「絢爛なる琉球楽器」展オープニングテープカット



展示解説風景

御座楽とは

琉球楽器は、御座楽と呼ばれる首里王府で儀式や宴席の際に演奏された音楽で使用されました。室内で座して演奏したことから「座楽」と称されました。これに対して、行列等で演奏される音楽は「路地楽」と呼称されています。御座楽は、演奏曲目や演奏楽器の構成からすると中国から伝来し、中国の明楽・清楽の流れを汲むものと考えられています。

御座楽は、冊封使接待の宴席や、江戸上りの際の江戸城での演奏など、公式行事には欠かせないものでした。古絵図等の中には、15歳〜16歳男子である楽童子が、中国音楽や琉球音楽を演奏し踊っている姿が描かれています。

しかし残念なことに、その御座楽は、王府の滅亡と共に消滅してしまいました。現在では、伝承されることもなく、楽譜も残っておらず幻の音楽となつてしま

まいりました。なお近年では、御座楽復元に向けて多くの研究がなされています。

尾張徳川家へ伝来した琉球楽器

徳川美術館所蔵の琉球楽器一式は、「中山王府」という金文字を蓋表に書いた黒塗りの長持に格納されており、琉球から尾張徳川家へ献上されました。寛政二（1790）年の江戸上りの際に琉球使節が持つて行ったものと推定されています。

楽器一式の構成は、中国から伝えられた楽器が主ですが、長線など琉球独自のものではないかと考えられている楽器もあります。また東南アジアに産出する鉄刀木と呼ばれる木や鼈甲、象牙など琉球では産出しない様々な材料が使われていることから、琉球の交流・交易範囲の広さを知ることができます。

また若干構成に違いのある楽器一式が、水戸徳川家にも献上され、伝来しております。



ながもち長持

楽器復元調査・制作について

復元制作にあたって、徳川美術館所蔵の実物を、透過X線・蛍光X線などで科学的に調査しました。その結果、楽器内部の構造やどの様な素材を用いて制作されているのかが分かりました。

ほとんどの楽器は、鉄刀木という堅い木で作られていました。この鉄刀木は、東南アジアで主に産出されますが、現在では、主要産地での伐採が禁止されており、日本にほとんど輸入されていなかったことから、材料の調達に時間を費やしましたが、中国の楽器工場に保管されていることがわかり、入手することが出来ました。



沖縄県立博物館での類似事例調査

他にも三線には、胴部分の飾りとして、鼈甲のテープを巻き、その縁に鯨の髭を貼り、さらにそれを象牙の鋸で止めるといふもので、現在では入手困難なものでしたが、無事集めることが出来、徳川美術館所蔵の楽器と同様な素材を

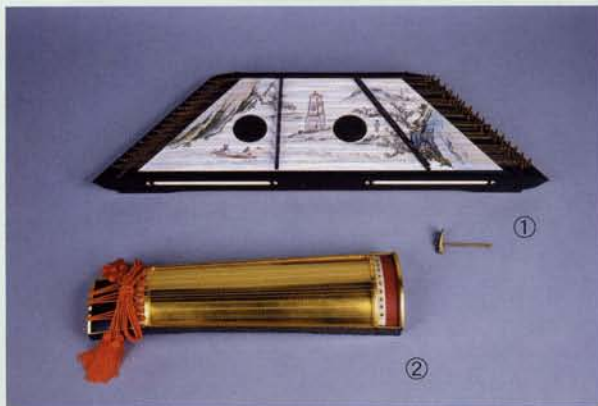


**おわりに**  
 今回復元した琉球楽器は、展示用と演奏用の二組を制作しました。先に述べたように、かつて演奏された御座楽は、現在伝えられておらず、幻の音楽となっており、今後は、首里城で演奏されたであろう御座楽の「音色」の復元に取り組んでいくこととしております。



音階検討のための打ち合わせ

用いて復元することが出来ました。  
 当初展示を目的として制作を進めました。が、実際に演奏することの出来る楽器についても別途復元制作を実施しました。  
 しかし徳川美術館所蔵の楽器は、後世の修復により、柱(フレット)の位置が動いていたため、そのままでは演奏することが出来ない状況にある事がわかりました。今回の復元制作にあたり、徳川美術館のご厚意により、所蔵されている笛の音をデジタル分析し、その音を基準として制作いたしました。



ヤウキン ディツヤン  
 ①夜雨箏 ②提箏



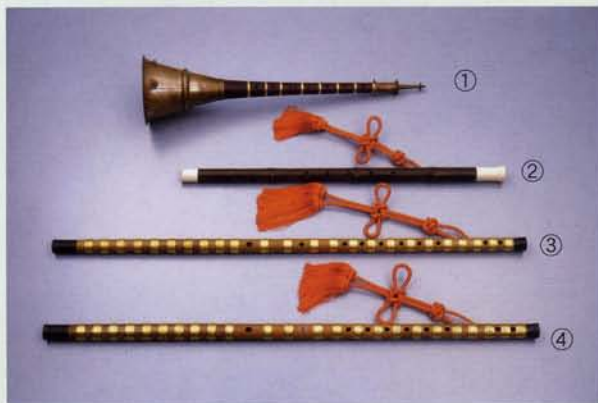
ルルセン フウキン ヒイハア イヤウキン  
 ①二線 ②胡琴 ③琵琶 ④月琴



スウスエン チヤスエン サンスエン サンスエン  
 ①四線 ②長線 ③三線(長) ④三線(短)



シャウトンロウ トンロウ  
 ①小銅鑼 ②銅鑼



ツヲナ クハン ホンデウ ホンデウ  
 ①哨呐 ②管 ③横笛(短) ④横笛(長)

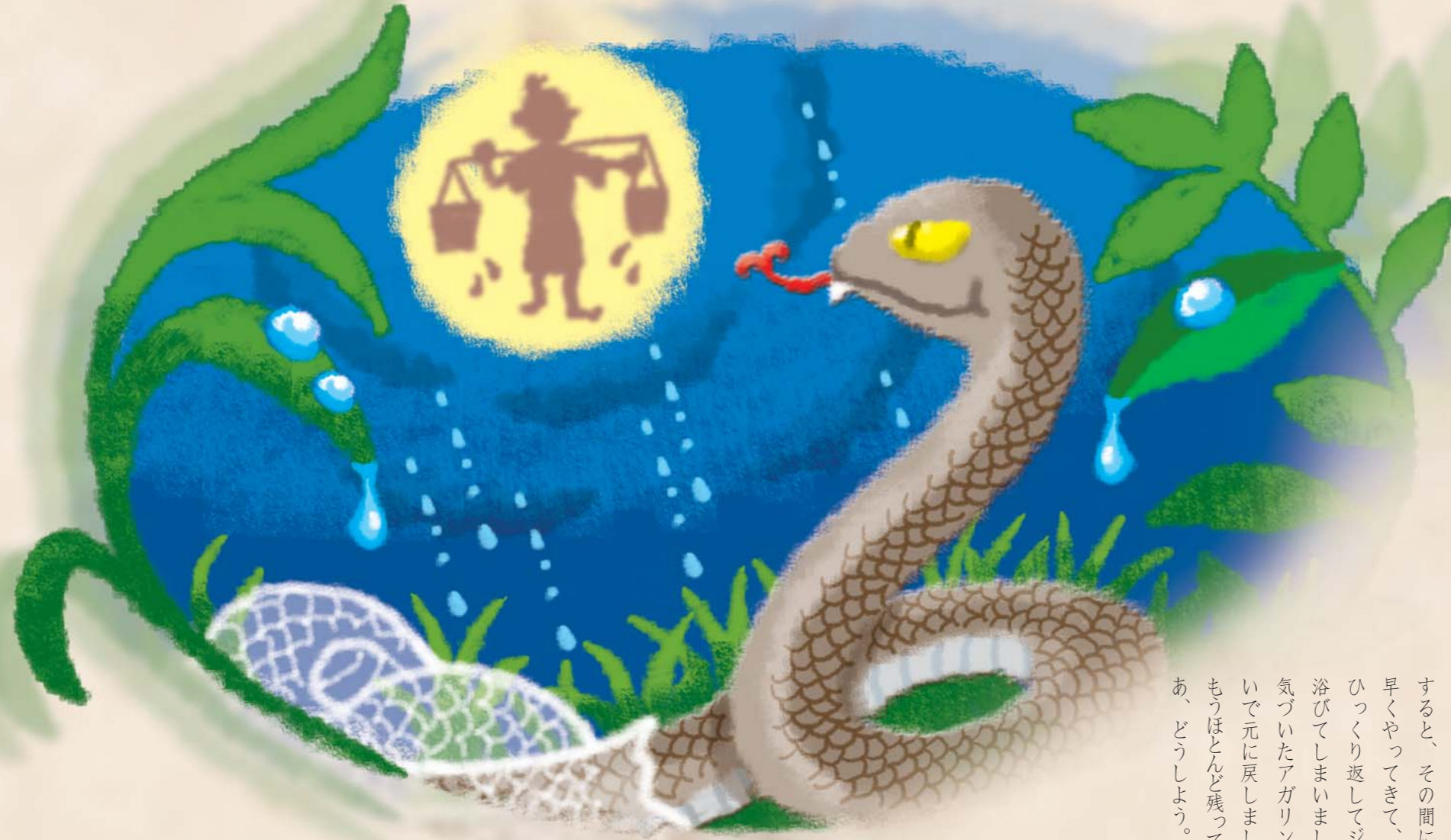


サンキン スイシン サンハン リヤウハン  
 ①三金 ②新心 ③三板 ④両班



# 月と 生き水

つきといきみず



大昔、宮古島の人たちに、未  
永く生きてもらおうと、月の神  
が、アガリンザという者をお呼  
びになりました。月の神がお呼  
びにするには、「水を入れた二つ  
の桶を下界に運んでいきなさい。  
一つの桶には生き水を入れてあ  
るので、これを人間に浴びせて  
いつまでも生きられるようにし  
なさい。もう一つの桶には死に  
水を入れてあるので、心の悪い  
蛇に浴びせなさい。」というこ  
とでした。アガリンザは言われ  
た通り、二つの桶を担いで下界  
へ降りていききました。

けれども、アガリンザは長い  
道のりを運んできたことで足腰  
が疲れました。そして、桶をお  
ろしてしばらく休んでいるうち  
にウトウトしてしまいました。  
すると、その間に一匹の蛇が素  
早くやってきて、生き水の桶を  
ひっくり返してジャブジャブと  
浴びてしまいました。その音に  
気づいたアガリンザは、桶を急  
いで元に戻しましたが生き水は  
もうほとんど残っていません。「あ  
あ、どうしよう。困ったなあ。」

しかし、このまま帰るわけにも  
いかないのです。もう一つの桶の  
死に水を人間にあげ、残った生  
き水はそのままにして天に帰っ  
てしまいました。人間は死に水  
を飲んだあと、桶の底の縁にわ  
ずかに残った水を指の先でさわ  
り、頭につけました。

天に帰ったアガリンザは正直  
に月の神に自分のしたことを報  
告しましたが、月の神は怒り  
になり「これは絶対に許されな  
いことだ。おまえは罰として、  
桶を持ったまま永久に立ってお  
れ。」と言われました。それが  
月の影だそうです。

それで月の中に立ったままの  
アガリンザは、せめてもの罪滅  
ぼしに、毎年の節（シチ）の夜  
に一尺の生き水をまき散らすの  
で、その夜は小雨が降るといわ  
れています。

また、それ以来人間は、命に  
は限りができましたが、生き水  
に触れた髪の毛と爪だけは何度  
も生え替わるといいます。そし  
て、蛇は何度も脱皮をして生き  
返るようになりました。

## 民話の ふるさと

### 宮古島

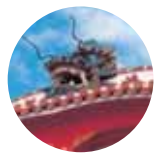
宮古島は琉球列島のほ  
ほ中間にある宮古諸島（宮  
古島、池間島、大神島、伊良  
部島、下地島、来間島、多良  
間島、水納島）の主島です。

沖縄本島（那覇市）の南西約二九〇kmの距離にあ  
ります。平成十七年（二〇〇五）十月一日に、多良間  
島・水納島を除くこれらの島々の一市三町一村が  
合併して宮古島市となりました。宮古島は高い山  
のない平坦な島で、周囲を美しいサンゴ礁の海で  
囲まれています。島内には「東平安名崎」などの景  
勝地のほか、「うえのドイツ文化村」や「人頭税石」  
など歴史文化を伝える名所・旧跡も数多く残され  
ています。また、台風の常襲地域、渡り鳥の「サシ  
バ」の飛来地としても知られています。近年は  
「全日本トライアスロン宮古島大会」やプロ野球の  
キャンプなどで「スポーツアイランド」としてのイ  
メージが定着しつつあります。



東平安名崎





御庭にて



歓門前にて

**首里城 親子クイズラリー**

■実施日時／平成十九年五月三日(木)～五月六日(日)まで

■実施場所／首里城公園

■実施概要／ゴールデンウィーク期間中(平成十九年五月三日～六日)に、親子で楽しむ「首里城公園親子クイズラリー」を開催いたします。

**平成十九年度 首里城公園 初夏のイベント**

**首里城 親子クイズラリー**

参加者は、スタッフ(財団職員)の案内で首里城を見学し、首里城や琉球王朝の歴史について説明を受けながら公園内の各所でクイズに解答し、首里城についての知識を深めてもらう企画となっています。クイズラリー終了後には、参加者全員に月桃紙で作成した「修了証」と素敵な記念品をご用意しております。

この機会にぜひ、親子でクイズを楽しみながら、首里城公園を散策してみませんか。

※写真は昨年度実施した親子クイズラリーの様子です。



※詳細は下記「イベント情報」をご覧ください！

**平成十九年度 海洋博公園 初夏のイベント**

**ゴールデンウィークは 海洋博へ出かけよう！**

沖縄の季節は「うりずん」から「若夏」へと変わる大型連休。さわやかなこの季節、海洋博公園ではご家族でお楽しみいただける様々なイベントがいっぱい！

噴水広場では、クラフト教室等の体験型イベント「子ども体験まつり」と恒例の「子どもマーチングフェスティバル」の開催、熱帯ドリームセンターでは、「バス乗り体験会」や「ハイビスカス展」、イルカ広場周辺施設では、「バックヤードツアー」や「イルカふれあい体験」、おきなわ郷土村では、「昔のおきなわ生活体験」、都市緑化植物園では、「植物のクラフト作り」、「絶滅危惧植物展」など、施設の特徴を活かしたイベントも盛り沢山！

今年の大規模連休も皆様のお越しをお待ちしております。

**海洋博公園子どもフェスティバル**

クラフト教室等の体験型イベント「子ども体験まつり」と、北部地区を中心とした児童・生徒による「子どもマーチング・バンドフェスティバル」を実施します。

●お問合わせ／業務課(TEL0980-48-2741)

場所 噴水広場 無料

**イルカ広場周辺バックヤードツアー**

●4月28日(土)～5月6日(日) 15:00～15:30 ●参加条件:小学生以上(小学生は保護者同伴) ●定員:20名/日 ●申込方法:当日申込 時間14:00～(定員に達し次第、締切)

●お問合わせ／海獣課(TEL0980-48-2748)

場所 イルカ広場周辺施設(受付はイルカラウン近く「パークセンター」) 無料

**イルカふれあい体験**

●4月28日(土)～5月6日(日) 10:20～10:50(受付9:30～)

●参加条件:小学生以上 ●定員:20名/日 ●申込方法:事前申込/参加希望日の2週間前までに往復ハガキで要申込、定員に空きがある場合のみ当日抽選により参加可能

●お問合わせ／海獣課(TEL0980-48-2748)

場所 イルカラウンプール(受付はイルカラウン近く「パークセンター」) 無料

**昔のおきなわ生活体験**

地元のおいしいおばあちゃんのおしゃべりを楽しみながら、三線演奏・簡単な踊りの体験をしてみませんか！

●毎日 9:00～17:00 ●参加条件:無し ●定員:三線体験 1回10名程度/踊り体験 1回10名程度/お茶振舞い・ゆんたく 定員無し ●申込方法:当日申込

●お問合わせ／業務課(TEL0980-48-2741)

場所 おきなわ郷土村 無料

**ゴールデンウィーク特別企画「ハイビスカス展」**

ハイビスカスの原種、園芸種を展示、期間中の土日祝日は1日先着100名様にハイビスカス苗木の無料配布あり！

●4月28日(土)～5月13日(日) 4月30日まで8:30～17:30、5月1日から8:30～19:00 ●参加条件:無し ●定員:無し

●お問合わせ／植物課(TEL0980-48-3624)

場所 熱帯ドリームセンター 入館料のみ

**ゴールデンウィーク特別企画「バス乗り体験会」**

南米原産の巨大なバスに乗って池に浮かぶ不思議な体験。記念写真の特典あり。

●4月28日(土)、29日(日)、30日(月)、5月3日(木)、4日(金)、5日(土)、6日(日)時間:10:00～15:00 ●参加条件:体重20kg未満のこども ※レプリカには20kg以上の大人も乗れます。 ●定員:無し

●お問合わせ／植物課(TEL0980-48-3624)

場所 熱帯ドリームセンター 入館料のみ

**植物のクラフト作り**

植物を使ったクラフト作りで、楽しく葉っぱや木の実に遊んでみませんか？毎月テーマを変えています。毎日開催！

●毎日 時間:8:30～17:00(5月以降は19:00まで) ●内容:4月 ころころボールを作ろう/5月 葉っぱで遊ぼう/6月 アダンでカタツムリを作ろう ●定員:無し ●申込方法:当日申込(10名以上は要予約)

●お問合わせ／植物園(TEL 0980-48-3782)

場所 都市緑化植物園 無料

**絶滅危惧植物展～ふるさとの植物を守ろう～**

環境庁版「レッドデータブック」によると、国内の希少植物は、1,887種類となっています。琉球列島に生育する植物で絶滅あるいは絶滅の恐れのある植物は846種が挙げられています。このような状況の中、当植物園では絶滅の恐れのある野生植物の保護、育成及び調査を進めています。今回は、全国の植物園や協会と連携して、絶滅危惧植物展を開催します。

●平成十九年5月20日～6月4日(予定) 時間:8:30～19:00

●お問合わせ／植物園(TEL 0980-48-3782)

場所 都市緑化植物園 無料



**琉球の文化遺産を 次代へ継ぐ ために**

**首里城 文化遺産を 基金事業 にお知らせ**

首里城は沖縄の歴史と文化の象徴として、わが国の地方文化の域を超えた貴重な文化遺産であります。先の大戦において、多くの文化遺産が灰塵に帰したり、国内外に散逸してしまいました。

平成四年十一月の首里城公園の開園を機に、沖縄県民一人一人が沖縄の伝統文化を再認識し、新しい沖縄文化を創造し、発展させることが最も大切だと考えます。

そのためには、国内外に散逸してしまつた首里城関係の文化遺産の収集、保存をするなど、国民的文化遺産を蓄積する運動を展開する必要があります。このようなことから、その資金源確保を図るべく、県、市町村、各種団体、また多くの方々から協力を得て、「首里城基金」が設置され、首里城関係の文化遺産の収集、保存及び展示紹介など、沖縄歴史文化の継承発展を目的とした「首里城基金事業」を実施しております。

「首里城基金」は、沖縄県及び県内市町村の出捐金と、個人、団体、企業などからの寄付金など、多くの方々のご協力とご支援によって成り立っています。

■首里城基金造成協力依頼

先の大戦で国内外に散逸してしまつた貴重な琉球文化遺産を収集・保存するため、当財団では「首里城基金」を設立し、その事業内容の充実を図るべく、広く県内外に寄付を募つていくところでございます。「首里城基金」の主旨をご理解いただき、皆様の温かいご協力、ご支援をいただきたく、お願い申し上げます。

【首里城基金の受付】

〒901-0185

沖縄県那覇市首里金城町二二一 (財)海洋博覧会記念公園管理財団 首里城公園管理センター

△お振込みの場合△

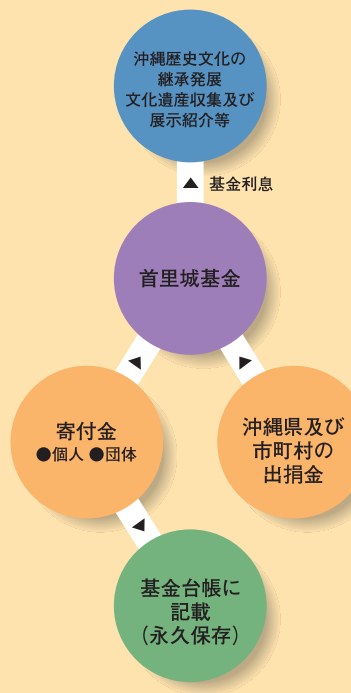
沖縄銀行首里支店(普通) 1318639

琉球銀行首里支店(普通) 6495

沖縄海邦銀行首里支店(普通) 0482155

口座名 首里城基金

**首里城基金のしくみ**



※イベント内容等は変更になる場合があります。最新情報や詳細はHP等でご確認をお願いいたします。(HPアドレスは裏表紙参照)